

医療ルネサンス

No5902



心臓を支える

④ / 5

和温療法で症状改善

読売新聞
2014.9.15

埼玉県東松山市の牧兼益さん(70)は10年前に、心臓が膨らんで壁が薄くなり、血液を送り出す力が弱くなる拡張型心筋症と診断された。心臓の負担を減らす薬物治療などを受け、自宅で生活してきたが、昨年は息苦しさに襲われ、救急車で埼玉医大国際医療センター(日高市)に入院することが続いた。

昨年12月に入院した際、主治医で心臓内科准教授の村松俊裕さんが牧さんと妻のしづえさん(68)に、サウナを用いた和温療法を説明するビデオを見せた。

和温療法は、独協医科大学特任教授の鄭忠和さんが、勤務していた鹿児島大学病院で開発した治療法。室温60度の治療室で15分間にわたり体を温めた後、タオルケットや毛布で全身を覆い、30分間保温する。血管が広がり、血液が流れやす



専用の治療室に入り、和温療法を受ける牧さん。右は主治医の村松さん(埼玉医大国際医療センターで)

くなるため、心臓の負担が軽減されるという。

日本循環器学会が2010年に発行した慢性心不全治療ガイドラインでは、死亡や再入院を減らす効果が認められ、薬物療法と一緒に行う治療として勧められている。鄭さんは「一般のサウナに比べ温度が低いため、心拍数、血圧はほとんど変わらず、安全で副作用もない」と話す。

◇和温療法研究所 ホームページ
<http://waon-therapy.com/>

牧さんは入院中、週5回、2週間にわたり和温療法を受けた。「調子が良くなった」という実感があり、退院後も週2回の治療を続けている。しづえさんは「6歳の孫と遊べて、畑に出られるようになった」と喜ぶ。

同県毛呂山町の吉田薫さん(58)も和温療法で症状が改善した一人。10年7月に心筋梗塞で倒れた後、心臓

の収縮を強める薬をやめられない時期が続いた。入院先の病院で和温療法の話聞き、11年8月に同センターに転院。3か月の治療で無事退院できた。その後も週2回の治療を続け、今年5月に肺炎で入院するまでの約2年半を自宅で暮らせた。

同センターで入院中に和温療法を受け、退院後はやめた15人中11人は3か月以内に再入院したのに対し、退院後も和温療法を続けた6人は自宅で過ごせた。

和温療法は現在、国に認められた先進医療で、保険診療を目指して臨床試験のデータを取りまとめている。鄭さんが所長を務める和温療法研究所によると、約80医療機関で実施されているが、病院側の費用負担で行われているケースが多く、広く患者を受け入れられないのが現状だ。

鄭さんは「できるだけ早く、多くの患者が治療を受けられるようにしたい」と話している。